マタイ２０；１～１６　　「主人の約束」 　講演アウトライン（翻訳用）

導入；私たちが待ち望み、来ますようにと祈る御国とはどういう所か？それは神が神として支配されている所であり、イエス・キリストが来られたことによって「既にと未だ」の緊張関係の中に位置付けられるもの。私達はそれを待ち望んでいると同時にその国に生きようとしている。そんな御国神の法則、価値観をイエスは多くの例え話を用いて伝えている。聖書ではしばしば葡萄園が神の世界とそこでの成され方を伝える様に、ここでも葡萄園の雇用を巡って人の世とは違った法則があることを教えられる。この話は直前に書かれた富める青年が財産を捨てられずにイエスについて行く事が出来なかった様子を見たペテロに達に対する警告でもある。この話の前後に書かれているの「先の者が後になり、後の者が先になる。」を具体的に示している例え話。この世で常識と言えるGive and Takeの価値観、労働とその報酬（この世では生活の基盤とさえ呼ばれる）の違いを通して、弟子たちに御国とは如何に神の主権的な選びと報いがある事を教えている。主人はご自分の約束に忠実な方だが、私達はそれが感謝にも成れば、不公平にも感じる。

本論１　御国は神の招きによって行き得る所。

例えばドイツで盛んな誕生日のパーティとは、自分ではどんなに親しいと思っても、本人から招待されなくては行く事は出来ない。天の御国も然り。ここでは早朝、９時、１２時、３時、５時と５回も主人自らが市場に出向いて労働者を雇っている。早朝に雇った際の報酬は相場の１デナリであったが、その後の時間帯では「相当のものを上げるから」とある。これによって後から雇われた者には或いは1デナリという具体的な額は知らされていなかったのかもしれない。彼らは1デナリまでは貰えないと思った事も考えられる。ここでは人が働ける時間や実績ではなく、主人の主権的な招き、憐みが葡萄園の労働を可能ならしめた。私達も主の一方的な招きによって救われ、御国の出張所といえる教会の一員となり得た。そんな招きを当然と受 け取るならばそこも不満ともなり得る。しかしそれに値しない、殆ど働けない自分さえ招かれ、雇われたとすれば、それは法外な恵みとなる。クリスチャン推薦と言う特殊な枠で大学に入学した友人は、そんな恵みに答えようと入学してから一生懸命勉強し、良い成績を収め、やがて献身して牧師となった。私達も自分がそれなりに出来る者だからではなく、キリストの十字架に現されている一方的な恵みによって救われ、御国にも招かれているのである。恵みを無駄にしない生き方をしたい。

本論２　御国とは恵み深い神の報いがある所。

ここでは夕方5時から一時間しか働かなかったものから賃金が支払われ、早朝から働いた者は最後に受け取った。いずれも同じ1デナリだった。早朝からから働いた者達は当然の様に文句を言った。同じ１デナリでも、喜び感謝して受けた者と、不平と呟きの中で受けた者とがいた。人との比較や競争の原理からするならば、早朝から働いた者の態度は当然でもある。しかし御国とは憐れみ深い神が報いる所である。自分をどこに置くか、どう見るかによって、その報酬は感謝ともなれば不満ともなる。主人の言葉 からすると御国とは憐れみ深い父なる神が主権者であり、人間の間の比較や競争の原理は排除される。ただしここで早朝から働いた者も、主人の為に長く働き、約束通りの１デナリを貰ったのである。それは本来ならば感謝して良かったはずである。しかしこの世の価値基準に囚われていると、自分は随分損した気持ちに成る。先の者が後に成るとは、この世では先だと思っていた者が後にされたように思うと言う事であり、この世では最後と思われるものが恵みによって先にされると思える世界である。私達はどちらの世界と価値観に生きているだろうか。願わくは私たちも御国に生きる者として、主の心をもって、失われた一匹の回復を喜べる９９匹、弟息子の帰還を父と一緒に喜べる兄息子でありたい。

結論；主は自分が救われるに値しないと思う者をこそ恵みによって救って下さる方である。スポルジョンの説教の例話：自分は赦されるべきではない罪人とした唯一の囚人奴隷のみが解放された話を紹介。私たちも朝から働いて報いられて当然の者ではなく、夕方５時に雇われ、殆ど働かなかったにも拘らず一日働いた報いを受けた者と自覚し、感謝と喜びをもって主の支配、御国を待ち望みたい。